

eラーニングによる日本語力向上の試み —医学部看護学科の実践より—

穂屋下 茂^{1,6}、早瀬 郁子²
長家 智子³、坂 美奈子⁴、久家 淳子⁵

For the Improvement of Japanese Ability by e-Learning
—A Trial at the Nursing Department, Faculty of Medicine—

Shigeru HOYASHITA^{1,6}, Ikuko HAYASE²
Tomoko NAGAIE³, Minako SAKA⁴, Junko KUGE⁵

要 旨

近年、日本の大学生の日本語力の低下が問題視されるようになり、日本語力の育成は大学での専門知識を学ぶための論理的思考力を支える基盤として、またキャリア教育として重要な課題となっている。そのため、多くの大学で初年次教育やリメディアル教育の一つとして、日本語力向上のための授業が実践されるようになった。

本稿では、佐賀大学を含む8大学間連携共同教育推進事業として作成した日本語eラーニング教材を、本学の医学部看護学科の「基礎的看護技術Ⅱ（コミュニケーション論）」の講義の中の「課題」として取り扱ったブレンディッド・ラーニングの成果を述べる。さらに、この日本語eラーニング教材の効果を探るため、受講者と未受講者両者に到達度テストを実施し、今後幅広い学生に対し日本語力向上のための学習機会となりうるかを検討する。

【キーワード】 日本語力、コミュニケーション能力、主体的学び、eラーニング、アクティブ・ラーニング

1. はじめに

文部科学省の学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむという基本的理念のもと、これからの「知識基盤社会」において、「課題を見出し解決する力」「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」「他者や社会、自然や環境とともに生きること」など、変化に対応する

¹ 全学教育機構専任教員

² 全学教育機構非常勤教員

³ 医学部看護学科教授

⁴ 医学部看護学科助教

⁵ 全学教育機構クリエイティブ・ラーニングセンター

⁶ 責任者

ための能力が必要であるとし、高校までの学習の中でも、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着と、これらを活用する力の育成の重要性が述べられている¹⁾。これまではこの力を「国語力」と述べていたが、2009年からは「言語力」と表されるようになった。「言語力」は知的活動（論理や思考）の基盤、感情・情緒の基盤、そしてコミュニケーション能力の基盤を成すとされ、各教科の目標を達成するための言語活動、それを支える能力として教育の重要性が示されている。さらに、馬場（2011）が指摘しているように、これまでの「国語」ではなく、客観的な視点で学習言語として学ぶこと、また、他者とのコミュニケーションのための能力をつけるという意義で「日本語力」育成の必要性は高くなってきている²⁾。本学においても、求められる学士力の中の「基礎的な知識と技能」の一つとして、「日本語による文書と会話で他者の意思を的確に理解し、自らの意思を表現し、他者の理解を得ることができる」ことを挙げている（佐賀大学学士力）。

しかし、「大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題」（2012）の第1章のアンケート調査や、小野（2007）が実施したブレイスメントテスト結果からも、年々大学生の日本語力が低下し、大学での専門知識を学ぶための論理的思考を支える力が足りない現状がうかがえる³⁾。

初年次教育の実践報告として、橋本ら（2012）は下位クラスの学生対象の「文章表現」の講義を実施し、国語の基礎学力が向上したという結果を得ている。金久保ら（2013）は日本語を分析的に見直し大学での学習活動につなげるという目的で、アカデミックな場面を想定した「話す力」の育成、文章作成の「書く力」の育成の2種の授業を実施し、日本語力の向上に一定の効果を上げている。しかし、専門や就職に結びつく形での日本語力向上の方法などの課題も残っているという。また、大場ら（2010）はアカデミック教育とキャリア教育を融合させた「日本語表現科目」を実施し、2つの共通する基礎力として、日本語基礎力、コミュニケーション基礎力、思考から表現へのプロセスの基礎力に着目したワークショップ形式の授業実践を行い、コミュニケーションによる自己変容が社会人としての基盤になること学んだとしている。他にも、メディア授業（eラーニング）と対面授業を組み合わせたブレンディッド・ラーニング「日本語リテラシー入門」の秋山（2015）の実践もある⁴⁾。これは、本学で実践したブレンディッド・ラーニングとの違いがあり大変示唆に富んでいる。

本稿では、本学におけるeラーニングによる日本語学習の実践例として、医学部看護学科の学生の「基礎的看護技術Ⅱ（コミュニケーション論）」の講義に、2014年度の入学生から、日本語eラーニング教材を用いたブレンディッド・ラーニングの学習の成果を報告する。また、2016年度には、eラーニング教材学習終了後に日本語能力を測るために到達度テストも実施した。その結果も併せて報告する。

2. eラーニング共通基盤

社会は、学士課程教育において「学生のための教育改革」「教員の質を変える教育改革」

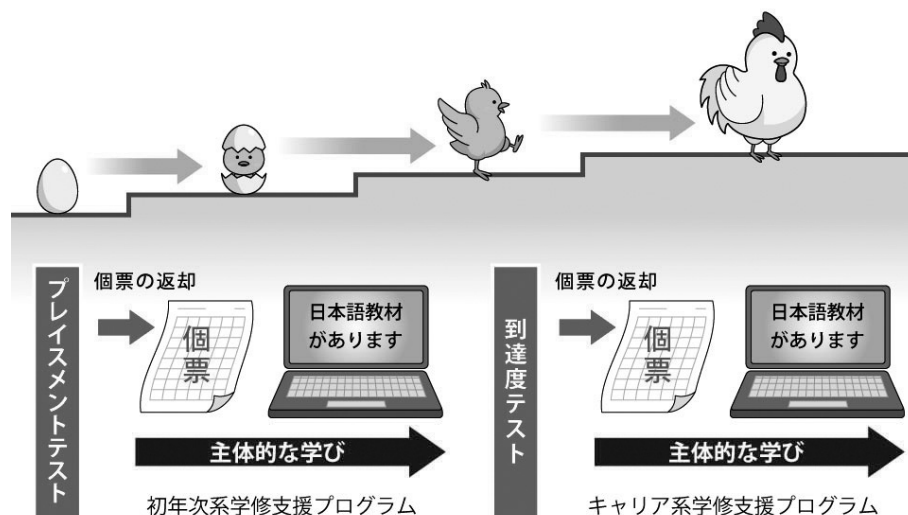


図1 eラーニングによる学習支援システム

への本格的な転換を求めている。「教育の質的転換への好循環」（中央教育審議会（答申）、2012）を確立させるためには、教員や職員の手間を極端に増やさずに運用できる ICT ツールを全面的あるいは部分的に導入するのが良い。ICT の機能を充分に使った e ラーニングは個々人に応じた学習を可能にする。

基礎学力の指標となる基幹科目として、英語、日本語（日本人学生対象）、数学、情報を位置づけ、以下のような特徴を持つ e ラーニング共通基盤（e ラーニング共通基盤推進事業）を構築した。本基盤の教材は、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」（2012-2016）において、千歳科学技術大学を中心に、国立大学、私立大学、短期大学の 8 大学が、何度も出題問題等の是非を吟味しながら整理・構築したものである。

各科目は、プレイスメントテスト、到達度テスト、学習教材等を用意した。テストは Web 上またはマークシートを利用して実施できる。テスト結果は個票にして、個々の学習者に提供される。この個票はデータ出力して各大学の学修ポートフォリオ等に取り込むことも可能である。

学習教材数は 7,000 以上（演習教材：約 5,900、解説教材：約 1,100）を用意した。学習教材は授業での利用に加え、プレイスメントテストの結果およびモデルシラバスに従って弱点を補うように各自で学習計画を立て、自主学修に利用することもできる。少子化に伴って、基礎学力が低い学生が入学してきて、大学教育についていけない学生も多い。本教材は彼らのリメディアル教育に利用できる。2015 年度の利用者数は、プレイスメントテストは延べ約 18,000 人、到達度テストは延べ約 8,000 人、学習教材は約 10,000 人であった。

3. 自主学習の促進

佐賀大学を含む8大学が連携して行った文部科学省の大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」(8大学間連携共同教育推進事業)の「日本語WG」で、eラーニングによる日本語教材を開発した。この目的は、図1に示すように、「初年次系学修支援プログラム」と「キャリア系学修支援プログラム」の一環として活用し「日本語力」の向上をめざすものである。

このeラーニングによる日本語教材は表1に示すように、(1)漢字、(2)語彙と意味、(3)表現法、(4)リテラシーの4領域から成り、レベルは10段階に分かれている。

この教材のねらいは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着であり、eラーニングでできる最も効果的な学習内容であるとする⁵⁾。

表1 問題分野とレベルの一覧

大分類	小分類	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6	レベル7	レベル8	レベル9	レベル10	発問数
漢字	読み (択一式)	訓読み	音読み	一般	一般	一般	熟字訓	一般	経済・生活語	社会法律	熟語・ことわざ	200問
	書き (択一式)	一般	一般	一般	後半：同音異義語	後半：同音意義語	同訓意義語	同音意義語	同音意義語	略語	3,5文字熟語	200問
語彙と意味	語義 (択一式)	一般	一般	一般	一般	一般	動詞	名詞	類義語	反意語	同音語など	200問
	四字熟語	数字関連 (記述式)	数字関連 (記述式)	心身語彙関連 (記述式)	身語彙関連 (記述式)	同文字関連 (記述式)	一般 (記述式)	一般 (記述式)	相対語 (記述式)	対話形式 (五択)	空欄2個 (五択)	200問
	ことわざ・成句 (択一式)	身体成句・ことわざ 一般	身体成句・ことわざ 一般	身体成句・ことわざ 一般	身体成句・ことわざ 一般	身体成句・ことわざ 一般	色彩	動物	動物・ことわざ 一般	対話形式・全	対話形式・全	200問
表現法	表記・表現・文法	カタカナ・四つがな (○×式)	助詞・数字表記・長音 (○×式)	数字関連 (○×式)	送り仮名 (○×式)	授受表現 (○×式)	授受表現・受身使役可能表現 (○×式)	受身使役可能表現・敬意表現 (四択)	敬意表現 (○×式)	敬意表現 超級・手紙文 (四択)	敬意表現 超級 (四択)	200問
リテラシー	短文読解	4題	4題	4題	4題	4題	4題	4題	4題	4題	4題	200問
発問総数	(7分類)	140問	140問	140問	140問	140問	140問	140問	140問	140問	140問	1400問

受身・使役表現の最も適切な使い方

1つ選択してください。

☐ いくらなんでも先輩に先輩を注意させるのは無理だよ。
 ☐ 飲めないのに無理に酒を飲ませられた。
 ☐ 隣に座らせてもらってもいいですか。
 ☐ そんなに急がされちゃ、たまらないよ。

チェック

【解説】※「飲めないのに無理に酒を飲ませられた。」は一段動詞「飲ませる」の受身形「飲ませられた」。「隣に座らせてもらってもいいですか。」は五段動詞「座る」の使役形「座らせて」、「そんなに急がされちゃ、たまらないよ。」は一段動詞「急がせる」の受身形「急がせられちゃ」が正解。

図2 LMS上の教材例 表現法 レベル7

* 大学間連携共同教育推進事業の日本語WGで作成した教材

本学では、eラーニングを実施するためのLMS（学習管理システム）としてMoodleを利用しているので、eラーニングによる日本語の学習もMoodle上で行えるようにした。

図2に示したものは、LMS上に示した教材の1例である。正しいものを選択し解答した後、解説を見て内容の確認をすることができるようになっている。

看護学科のeラーニングによる日本語学習は、看護学科1年次の看護専門科目「基礎的看護技術Ⅱ（コミュニケーション論）」の一環として行うようにした。ただし、授業時は、コミュニケーションの基礎知識から医療者として必要となるコミュニケーション技法や接遇などの講義やロールプレイなどの実践でほとんど余分な時間がないので、日本語eラーニング教材の中から「表現法（表記・表現・文法）」分野を選択し、授業時間外の課題として学習するようにした。すなわち、eラーニングによる日本語学習は、授業時間外に主体的に学習しなければならない。

LMSにおいて、10段階のレベルの問題は、完全に満点を取るまで繰り返さなくてはならないように設定した。各レベルは20問で構成されている。LMSで教員は学生全員の学習履歴や進捗状況を調べることができる。2016年度のレベル別受験回数を図3に示す。

レベル1～4は「カタカナひらがな表記・数値関連表現・送り仮名表記」で、基本的な表記事項の学習であったので、1度で満点を取る学生も多く、比較的少ない回数で終わっている。しかし、レベル5の授受表現から1度で終了する学生がほとんどいなくなり、受験回数の増加が目立つ。レベル6の可能・受身・使役表現では、学生の初回の得点が、6割～9割と幅があり、解答時間も1分～10分と広がっている。レベル7からの敬意表現からは、3回、4回と受験回数の増加が顕著で、さらに初回の得点が低くなっている。敬語は小学校5年の教科書に初めて登場し、中学・高校と断続的に学習しているものの、実際の社会生活で使用する場面が減少し、対話的コミュニケーションに苦慮していることがわかる。前年度の実施結果でも、ほぼ同様の結果を得た。繰り返し学習をすることで、知識の定着を図ることができたと思われる。

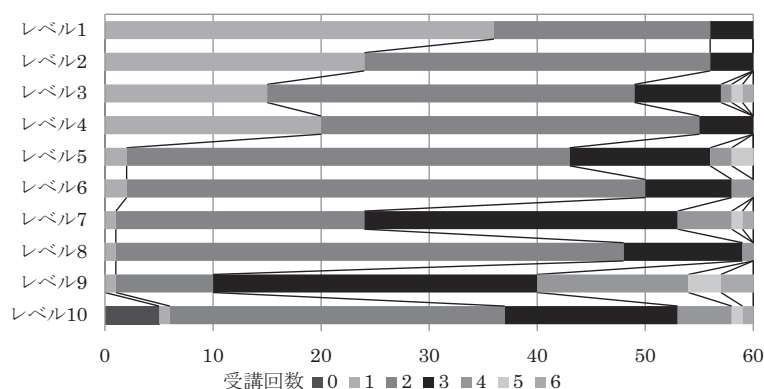


図3 2016年度のレベル別受験回数

4. 到達度テスト

到達度テストは、日本語 e ラーニング教材すべての分野を網羅して作成されたものである。大学間連携共同教育推進事業でテストを作成している 8 大学で、多くの学部・学科等で試行を重ねながら、適切に日本語力が測定できる到達度テストの開発を進めている。

到達度テストの内容は「漢字分野（漢字の読みと書き、四字熟語）」「語彙分野（語義・ことわざ・成句）」「文法・敬語分野（受身・使役・可能、敬語）」「読解力分野（短文読解・長文読解・図表読解）」の 4 分野に分かれ、全 60 問（受験時間：20 分）と全 100 問（受験時間：30 分）のタイプが用意してある。全 60 問の到達度テストを 1,078 名が受験した結果（得点分布）を図 4 に示す。ほぼ正規分布に近い状態にある。

看護学科の学生には、学習した「文法・敬語分野」と未学習分野との比較を試みることに、他学部の学生との比較をすることによって学習の効果を検討するために、全 100 問（受験時間：30 分）の問題を受けてもらった。2016 年度の結果を表 2 に示す。本学の看護学科、文系の学生、理系の学生の平均値を示す。

本学の文系、理系の学生はデジタル表現技術者養成プログラム（穂屋下、2016）を履修している学生を対象とした。彼らには、看護学科の学生のような自主学習は強制していない。日本語 e ラーニング教材の「表現法（表記・表現・文法）」は、到達度テストにおいては「文法・敬語分野」に相当する。

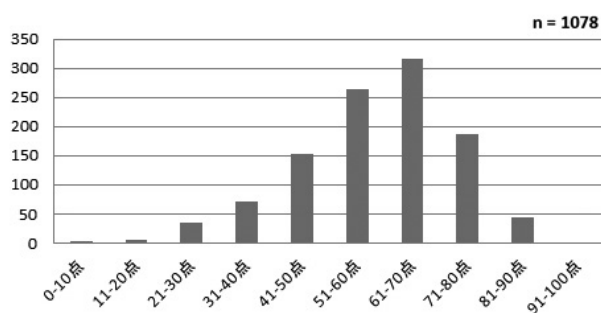


図 4 到達度テストの得点分布 (60問)

表 2 2016 年度の実施状況

	佐賀大学（全100問版）			他大学平均 （全60問版）
	看護学科	文系	理系	
学生数	59名	11名	28名	1,078名
漢字分野	80%	71%	69%	69%
語彙分野	73%	74%	68%	62%
文法・敬語分野	60%	60%	50%	51%
読解分野	47%	64%	51%	52%

参考比較のため、8大学間連携共同教育推進事業の1,078人の平均値を示す（ただし、こちらは同じような問題であるが、受験時間を20分用に短縮した全60問で構成されたものである）。他大学においては、プレイスメントテストの後、日本語eラーニング教材で自主的に学習させている大学もあれば、別に「日本語リテラシー教材」を作成して授業でも学習させている大学もあり、またほとんど学習をさせていない大学もあり、教材利用は様々である。

eラーニングを主体的に学習した看護学科の学生のテスト結果をみると、漢字や語彙といった基礎的分野の得点が高いのに比べ、応用力が必要な読解分野の得点が高いことがわかる。その中で基礎から応用へと繋げる力である「文法・敬語分野」の得点は高いことがわかる。他大学平均と比べても、応用力が必要な読解分野の得点はほぼ同じであるが、漢字分野、語彙分野、文法・敬語分野で高くなっているように見受けられる。

今回看護学科の学生に試行した「文法・敬語分野」の学習で、明確にその効果があったといえる状況にはないが、eラーニング学習の成果が出ているといえる結果ではないだろうか。

5. 主体的学習、到達度テスト受験後のアンケート

2016年度、看護学科学生に採った「日本語eラーニング教材」についてのアンケート結果を図5に示す。日本語学習の必要性については多くの学生がこの学習を機に実感し、その後の学習意欲にもつながっている。また、学習効果も半分以上が評価している。ただ、全200問の問題数が多いと感じた学生が多く、授業時間以外の学習であったので、負担感があったようだ。

eラーニング学習の良さ・問題点についてまとめたものを図5に示す。「いつでも」、「どこでも」できるし、自分のペースでできるなど、eラーニング特徴を捉えた回答が多かった。現在、Moodleはスマートフォンにも対応しているので、スマートフォンを利用して回答した学生が多かった。まさに、eラーニングによる学習は「いつでも」、「どこでも」可能になってきている。

本eラーニングシステム（LMS、eラーニング教材、メンターによる支援体制等）につい

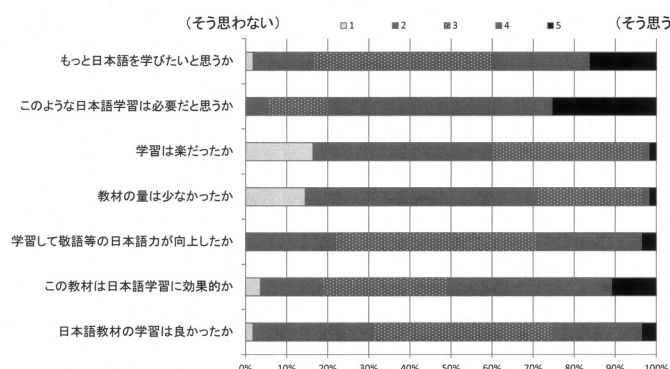


図5 学習後のアンケート結果

て、「分からないときに質問できない」、「もう少し解説を充実した方がよい」と改善を求める声も聞かれ、この点については配慮が必要である。

コミュニケーション能力は、看護職者にとって身に付けるべき専門技能である。幅広い年齢の人々を対象に看護を展開するためにも、敬語を十分に使えるようになることが求められている。本システムは、段階を追って学習できるもので、敬語活用能力の向上に役立った。eラーニングによる日本語教材学習は、看護を学ぶ学生にとって有効である。

6. まとめ

本学に限らず日本全国の大学において、日本語力を高めるための日本語教育の是非が問われ、入学前教育やブレイスメントテスト、リメディアル教育等、様々な試みがなされている。自らの考えを深め、他者とのコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力を高めるため、基礎力を定着させ、さらに専門知識の正確な定義と運用、必要な言語力を学生自らがインプットしアウトプットできる力を育成しなければならない。

しかし、大学における教養教育や専門教育の中で、日本語教育の時間を割くのは困難な状態である。そこに、インターネットの発達により、eラーニングを利用した自主学習ができる状態になってきている。本実践研究では、患者とのコミュニケーション能力が必要である看護学科の学生にeラーニングによる日本語（文法・敬語分野）を学習させてその効果を確認した。

今回のeラーニングによる日本語の主体的学習は受講した学生のアンケート結果や指導教員のコメントおよび到達度テスト結果より、有効性があることがわかった。今後は本学として組織的にいかに導入すべきかを試みる予定である。

謝辞

本教育実践を遂行するにあたり、教材の作成していただいた大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」の日本語WGの皆様、また佐賀大学クリエイティブ・ラーニングセンター(元eラーニングスタジオ)のスタッフの皆様方に感謝の意を表す。

注

- 1) 経済協力開発機構(OECD)が2015年に実施した生徒の学習到達度調査(PISA)の「読解力」の成績をみると、日本の平均正答率は63%で35ヶ国中6位となっている。これまでの結果から、クリティカルシンキングと言語運用能力として情報の取り出しはできるが発信する力が相対的に低いという傾向が出ている。今後の課題として文科大臣は「子供たちの資質・能力を育成する教育の実現や国語教育の充実」と「読解力の向上に受けた対応策に基づく学習の基盤となる言語能力・情報活用能力の育成」とを回答している。

- 2) リメディアル教育学会監修「大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題」の中の小野ら(2012, p.144)によると、大学での様々な学びや社会人として必要となる理解力、論理力、論述力などの思考力、さらに自分の人生を組み立てるための想像力や問題解決力などを支える力をさすもので、勿論言語力も含み、これらの力を伸ばすには「学びの変換(組み換え、再体制化、再組織化)」が必要であるとしている。
- 3) 文科省高等教育局が2016年に発表した調査報告「平成26年度の大学における教育内容の改革状況について(概要)」によると、初年次教育に取り組んでいる大学は、764校のうち710校(96%)にのぼり、「論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム」を実施している大学も466校(63.1%)と年々その数が増加している。
- 4) 自分の考えを相手に分かり易く伝える日本語表現力を身につけることを目的に全8回をメディア授業と対面授業と隔週で実施し、対面授業においてはアクティブ・ラーニングに取り組み、メディア授業では対面授業の振り返りとして、解説動画視聴や確認問題の回答、ポートフォリオ作成などの課題があった。新しい形態の授業が新鮮で学習効果も上がったと述べている。ただ、対面授業でのグループ活動の時間配分やTAの負担、メディア授業での画面上での言語化された情報のみを読み取る難しさ、などの課題が挙げられていた。
- 5) 国立教育政策研究所による小中高の教師へのアンケートで、国語学力は低下したかという質問には63%の教師が「そう思う・とてもそう思う」を選び、その中でも「語彙力の低下」は「文章を書く力」よりも多く63%と1位となっている。

引用・参考文献

- 馬場 真知子. (2011). 日本人大学生の日本語力養成について. リメディアル教育研究、第6巻第1号.
- 佐賀大学学士力: <https://www.saga-u.ac.jp/koho/2010gakushiryoku.htm> (2016/12/16アクセス)
- リメディアル教育学会(監修). (2012). 大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題. ナカニシヤ出版.
- 小野 博. (2007). 日本人学生を対象とした日本語・英語教育—リメディアル教育から実力養成教育への展開—. 2004～2006年度科学研究費報告書.
- 橋本美香・新見明子・黒田裕子. (2012). 日本語力向上のための初年次教育の実践—日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する「文章表現」の取り組み—. 川崎医学会誌一般教養篇, 38, 25-32.
- 金久保紀子・亀田千里. (2013). 初年次必須科目「日本語A」「日本語B」に関する報告と検討. 筑波学院大学紀要, 8, 91-99.
- 大場理恵子・中村恵子. (2010). アカデミック教育とキャリア教育を融合した日本語表現法授業の実践例—アカデミック教育とキャリア教育に共通する基礎力の涵養をめざして—. アカデミック・ジャパニーズ, 2, 22-31.
- 秋山栄治・仲道雅輝. (2015). 初年次教育科目『日本リテラシー入門』の実践とその成果. 大学教育実践ジャーナル, 13, 33-41.
- 中央教育審議会(答申). (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学

び続け、主体的に考える力を育成する大学へ。文部科学省。
e ラーニング共通基盤推進事業：<https://www.uela.cloud/el-kiban/>（2016／12／16アクセス）
大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」。
（2012-2016）。文部科学省。<http://eight-univ.spub.chitose.ac.jp/>（2016／12／16アクセス）
穂屋下 茂（監修）。（2016）：就業力を育むデジタル表現技術者養成プログラム－創造的表現力を
重視したアクティブ・ラーニングの実践－。五弦舎。